はしがき

私たちが生きる世界はいま，かつてないほど複雑に揺れ動いている。2度の世界大戦を経て形成されてきた国際秩序は，足元から崩れつつあるようにみえる。本書執筆時点において，ロシア・ウクライナ戦争は終結の見通しが立たず，パレスチナ・ガザ地区では停戦合意が存在するものの，散発的な攻撃がいまだ続いている。アフリカでは，治安の悪化や政治腐敗への不満を背景に軍事クーデターが相次ぎ，各地で深刻な人道危機が報告されている。さらに，アメリカとイスラエルによる国際法違反と評されるイラン攻撃は，地域全体を巻き込む武力衝突へと発展し，世界経済にも大きな混乱をもたらしている。

武力紛争，社会的不平等，貧困，気候変動，分断された世界――これらの問題は相互に絡み合い，単純な解決を拒むかのように私たちの前に立ちはだかっている。しかし同時に，世界の各地では，人々が対話を重ね，制度を見直し，壊れた関係を修復しようとする努力もまた着実に広がっている。たとえばシリアでは，長期にわたる紛争によって荒廃した故郷に戻った人々が，多くの困難を抱えながらも，自らの手で平和な未来を築こうと歩みを進めている。平和構築論とは，まさにこのような「壊れたものをつなぎ直す営み」を体系的に理解し，実践へと結びつけるための学問である。

本書は，平和構築論を初めて専門的に学ぶ学部生・大学院生を主な対象とし，その基本的概念，歴史的背景，主要な制度，そして実践を体系的かつ平易に整理することを目的としている。国際社会による平和構築活動に焦点を当てているため，入門書でありながら，一定程度の国際政治や国際機構に関する基礎知識を前提としている。専門用語については可能な限り説明を付したが，必要に応じて国際政治学，国際機構論，国際法などの既存のテキストも参照していただきたい。

現在，国際社会による平和構築活動は，危機的な局面にある。国連平和維持活動（PKO）はますます危険な環境での活動を余儀なくされており，2014年以降，新たなミッションは設立されていない。加えて，第二次トランプ政権下におけるアメリカ国際開発庁（USAID）の解体をはじめ，各国の軍事費の増大に

伴う開発途上国への支援削減は，現場での平和構築の取り組みを一層困難なものとしている。とりわけ衝撃的なのは，平和への「処方箋」とみなされ，長らく平和構築の中心的理念であった自由主義的価値観や制度そのものが，それを体現してきた社会の内部において否定されるようになっていることである。今後，国際的な平和構築活動が停滞，あるいは後退の時期に入る可能性は否定できない。しかしそれは，平和構築論を学ぶ意義が失われることを意味しない。世界各地の紛争現場において，人々の平和への希求が消えることはない。「平和を築く営み」を模索する努力もまた，止むことはないだろう。

本書の執筆者はいずれも，大学や研究機関，ならびに開発協力・平和構築支援機関に所属している。各章およびコラムは，執筆者それぞれの研究成果や，現場で培われた知見・経験に裏打ちされたものである。日々の教育実践を通じて得られた学生たちの関心や疑問に応えることを念頭に置いて執筆された章も含まれている。多忙ななか，執筆をご快諾くださり，進行の遅い編集作業にも辛抱強くお付き合いいただいた執筆者の皆さまに，心より感謝申し上げたい。

編者３名は，毎年夏に広島県主催の「ひろしまジュニア国際フォーラム」において，平和構築に関するレクチャーを担当してきた仲間でもある。2015年に始まった同フォーラムは，例年夏に広島で開催され，日本人高校生，日本在住の外国人高校生，そして海外の高校生が参加してきた。参加者は「平和な世界の実現に向け，私たちに何ができるのか（核兵器廃絶と復興・平和構築に向けた取り組み）」を共通のテーマとして議論を重ね，その成果として毎年「広島宣言」を作成・発表してきた（2025年終了）。「100％未来」を生きる高校生たちと向き合いながら，原爆によって壊滅的な被害を受けつつも，廃墟から復興を遂げた広島という地で平和構築を語ることの意味を，私たちは何度も考えさせられた。

ウクライナや中東，アフリカで続く惨事はもちろん，世界各地で生じている多様で過酷な現実のなかで，声を上げることのできない人々の存在に，私たちはどのように向き合うことができるのだろうか。本書を通して，平和な未来に向けて私たち１人ひとりに何ができるのかを，読者の皆さんにも共に考えていただければ幸いである。本書が，読者自身の視野を広げ，より良い世界に向けた一歩を踏み出す契機となれば，これに勝る喜びはない。

編者を代表して　クロス京子